

アバリシオン  
天象

現象としての芸術作品にもっとも近いものに、天における星の出現を意味する  
アバリシオン  
天象がある。

アバリシオン  
芸術作品と天象との間には、人間の頭上に出現するものであり、人間の意図を  
離れ、事物の世界を離れたものであるという一致点が見られる。

テオドール・W・アドルノ『美の理論』

人里離れた山頂で、手もとの明かりを消し、星々の光を一面にたたえた夜空に目をやる。  
そして、しばらくして、北極星はどこか、北斗七星はどこかと探してみる。

ところが、夜空に勢揃いしているそれらの光は、私たちとここ・今に偶然に出会っているだけ  
であって、それらの中には、本当はとうの昔に消滅してしまった星の残光も少なからず含まれ  
ているだろうし、反対に、私たちの目にはただ漆黒の闇にしか見えない場所にも、ここ・今に  
たどり着かなかった無数の光があるはずなのである。

この星々の光を一面にたたえた夜空の姿と、光の粒を一面にたたえた写真の姿は、何  
だかとても似ている。ふと、そんなことを思った。

星が生まれ、漆黒の闇の中に突如新しい光が出現する現象、  
アバリシオン  
天象。

それは、ここ・今の夜空がどうしてそれとしてあるのかを、そして、見えない無数の光の  
存在を、夜空を見上げる者にだけ告げ知らせる。

写真にも、本当はそんな特別な瞬間があるのではないかと、時々思う。

2020年9月  
圓井義典